

発達段階ごとの特徴と支援のあり方

小学校低学年

<自己中心的な集団>

- ・ 知的能力の発達や学校などにおける生活経験によって、次第に自主性が増し、様々なものとのかかわりを広げていきます。
- ・ 幼児期の自己中心性はかなり強く残っていますが、他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達していきます。
- ・ 心に感じたことを思いのままにつぶやいたり、喜びや悲しみなどを体全体で表したりします。また、周りの人たちから受ける愛情や誠実さなどに対しても敏感です。

<支援のあり方>

個人差が大きく見られるので、一人一人のよさやがんばりをほめたり、気持ちに寄り添って話を聞いたりするなどの温かな支援に心がけましょう。また、子どもの成長の様子を記録し、それを活かして、伸びようとする力をさらに大きくしていくことも大切にしましょう。

小学校中学年

<部分的な依存関係の集団>

- ・ 「ギャングエイジ」と呼ばれ、閉鎖的な集団をつくり、仲間だけに通じるルールや約束ごとを形成したがる傾向があります。
- ・ 全体としてのまとまり感に欠け、各々が勝手に行動しているようにも取られがちになりますが、後々の人間関係形成力や社会的知識、技能を獲得する力につながるどころであり、特性を踏まえた上で適切な支援をする必要があります。

<支援のあり方>

自分や周りの友だちに起こった問題を集団の力で解決したり、責任分担や集団行動などを確実に行的たりする力が大きく伸びてくるので、このような力を子どもの主体的な活動を通して、大いに伸ばしていきましょう。

小学校高学年

<共同体に統一される集団>

- ・ 思春期の入り口に位置し、子どもの個性が開花し始め、自律的な行動ができるようになるので、集団の組織化や活発化が期待できます。
- ・ 相手の立場に立った考えによる行動ができるようになりますが、その反面、自分と他者との能力を比較する意識も高まり、孤立を恐れ、自己防衛のために、固定的なグループ関係に固執した小集団が発生することもあります。

<支援のあり方>

客観性の芽生えとともに、親子関係・友人関係・教師との関係・身体の変化などに対して敏感になってきますので、集団の中で、安心して生活するために、お互いに認め合い、支え合える人間関係づくりに務めましょう。

特に、反社会的な行動や人間関係の問題解決では、裁判官や権力者のような対応をしないように心掛けましょう。

中学校

<自治的・主体的集団>

- ・ 正義感を強くもち、人間としていかに生きるべきかを推し量りながらも、自らの意志と反対に行動しがちな心の揺れや矛盾が同居する難しい時期に入ります。
- ・ 3年間の成長過程を経て、社会生活に十分に対応できるようにするとともに、自分を律することのできる心を育成していきます。

<支援のあり方>

個性がはっきりし、信頼を求める傾向が強いので、心の揺れを察知し、一人一人に合った所属感について配慮することが大切になってきます。

そこで、周りの者が、カウンセリング感覚をもち、一人一人の自尊感情を大切にはぐくみましょう。

また、どの生徒にも中1ギャップが生じる可能性もあるので、予防的な対応に心掛けましょう。

子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題

(1) 乳幼児期

○ 乳幼児期は、母親や父親など特定の大人との間に、愛着関係を形成する時期である。乳幼児は、愛情に基づく情緒的な絆による安心感や信頼感の中ではなくまれながら、さらに複数の人とのかかわりを深め、興味・関心の対象を広げ、認知や情緒を発達させていく。また、身体の発達とともに、食事や排泄、衣服の着脱などの自立が可能になるとともに、食事や睡眠などの生活リズムが形成される時期でもある。

さらに、幼児期には、周囲の人や物、自然などの環境とかかわり、全身で感じることにつながる体験を繰り返し有することで、徐々に、自らと違う他者の存在やその視点に気づきはじめていく。いわば、遊びなどによる体験活動を中心に、道徳性や社会性の原点を持つことになる時期である。

○ 現在の我が国における乳幼児期の子育ての課題としては、親子関係では、親の子育てへの無関心や放任などの問題から、過保護や甘やかせすぎ、さらには虐待といった、多様な問題が指摘されている。さらには、少子化の影響で、子ども同士の地域での触れ合いが減少している問題も見られる。

○ これらを踏まえて、乳幼児期における子どもの発達において、重視すべき課題としては、以下があげられる。

- ・ 愛着の形成(人に対する基本的信頼感の獲得)
- ・ 基本的な生活習慣の形成
- ・ 道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実

(2) 学童期

(小学校低学年)

○ 小学校低学年の時期の子どもは、幼児期の特徴を残しながらも、「大人が『いけない』と言うことは、してはならない」といったように、大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができるようになる。また、言語能力や認識力も高まり、自然等への関心が増える時期である。

○ また、この時期に限らず、家庭における子どもの徳育にかかわる課題として、都市化や地域における地縁的つながりの希薄化、価値基準の流動化等により、保護者が自信を持って子育てに取り組めなくなっている状況がある。さらに小学校低学年の時期においては、こうした家庭における子育て不安の問題や、子ども同士の交流活動や自然体験の減少などから、子どもが社会性を十分身につけることができないまま小学校に入学することにより、精神的にも不安定さを持ち、周りの児童との人間関係をうまく構築できず集団生活になじめない、いわゆる「小1プロブレム」という形で、問題が顕在化することが多くなっている。

○ これらを踏まえて、小学校低学年の時期における子どもの発達において、重視すべき課題としては、以下があげられる。

- ・ 「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成
- ・ 自然や美しいものに感動する心などの育成(情操の涵養)

(小学校高学年)

○ 9歳以降の小学校高学年の時期には、幼児期を離れ、物事のある程度対象化して認識することができるようになる。対象との間に距離をおいた分析ができるようになり、知的な活動においてもより分化した追求が可能となる。自分のことも客観的にとらえられるようになるが、一方、発達の個人差も顕著になる(いわゆる「9歳の壁」)。身体も大きく成長し、自己肯定感を持ち始める時期であるが、反面、発達の個人差も大きく見られることから、自己に対する肯定的な意識を持たず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。

また、集団の規則を理解して、集団活動に主体的に関与したり、遊びなどでは自分たちで決まりを作り、ルールを守るようになる。一方、ギャングエイジとも言われるこの時期は、閉鎖的な子どもの仲間集団が発生し、付和雷同的な行動が見られる。

○ 現在の我が国における小学校高学年の時期における子育ての課題としては、インターネット等を通じた擬似的・間接的な体験が増加する反面、人やもの、自然に直接触れるという体験活動の機会の減少があげられる。

○ これらを踏まえて、小学校高学年の時期における子どもの発達において、重視すべき課題としては、以下があげられる。

- ・ 抽象的な思考への適応や他者の視点に対する理解
- ・ 自己肯定感の育成
- ・ 自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養
- ・ 集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成
- ・ 体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり

(3) 青年前期(中学校)

○ 中学生になるこの時期は、思春期に入り、親や友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気づきはじめるとともに、自意識と客観的事実との違いに悩み、様々な葛藤の中で、自らの生き方を模索しはじめる時期である。また、大人との関係よりも、友人関係に自らへの強い意味を見いだす。さらに、親に対する反抗期を迎えたり、親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、思春期特有の課題が現れる。また、仲間同士の評価を強く意識する反面、他者との交流に消極的な傾向も見られる。性意識が高まり、異性への興味関心も高まる時期でもある。

○ 現在の我が国においては、生徒指導に関する問題行動などが表出しやすいのが、思春期を迎えるこの時期の特徴であり、また、不登校の子どもの割合が増加するなどの傾向や、さらには、青年期すべてに共通する引きこもりの増加といった傾向が見られる。

○ これらを踏まえて、青年前期の子どもの発達において、重視すべき課題としては、以下があげられる。

- ・ 人間としての生き方を踏まえ、自己を見つめ、向上を図るなど自己の在り方に関する思考
- ・ 社会の一員として自立した生活を営む力の育成
- ・ 法やきまりの意義の理解や公德心の自覚

(4) 青年中期(高等学校)

○ 親の保護のもとから、社会へ参画し貢献する、自立した大人となるための最終的な移行時期である。思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、大人の社会でどのように生きるのかという課題に対して、真剣に模索する時期である。

○ 現在、我が国では、こうした大人社会の直前の準備時期であるにもかかわらず、自らの将来を真剣に考えることを放棄したり、目の前の楽しさだけを追い求める刹那主義的な傾向の若者が増加している。さらには、特定の仲間の集団の中では濃密な人間関係を持つが、集団の外の人に対しては無関心となり、さらには、社会や公共に対する意識・関心の低下といった指摘がある。

○ これらを踏まえて、青年中期の子どもの発達において、重視すべき課題としては、以下があげられる。

- ・ 人間としての在り方生き方を踏まえ、自らの生き方について考え、主体的な選択と進路の決定
- ・ 他者の善意や支えへの感謝の気持ちとそれにこたえること
- ・ 社会の一員としての自覚を持った行動

お問い合わせ先

初等中等教育局児童生徒課

(初等中等教育局児童生徒課)